

## 今年度発掘調査の紹介

### おおつぼ 大坪遺跡

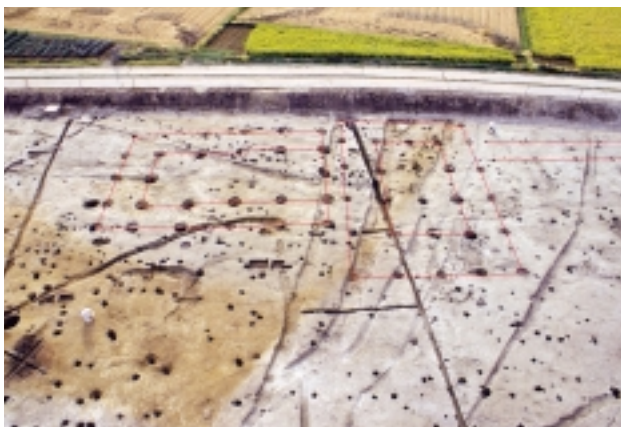
(阿賀野市寺社甲 2218 ほか)

大坪遺跡は阿賀野川右岸の標高約13mの自然堤防上に立地します。東方に五頭山を望み、西方には弥彦山が見えます。国道49号安田バイパスの建設工事に係る10,000㎡を、5月～12月にかけて発掘調査しました。調査の結果、平安時代末頃(11～12世紀)を中心とする館ないし寺院に関連する遺跡であることが分かりました。遺構は掘立柱建物54棟、木棺墓3基・火葬墓1基、井戸24基などが見つかりました。また、調査区東側では南北300mにわたる大溝が確認されました。調査区北側で見つかった大型掘立柱建物SB4は、長さ14.2mの周囲に底を持つ立派な建物で、北側に長さ20mにわたるL字形の回廊状施設が附属するようです。SB4の南側にあるSB5も、長さ12.8mで三面に底を持ちます。これらの南東側には木棺墓2基が付随するように見つかり、漆器椀・皿の優品が出土しました。また、当時高価であった大陸からの輸入磁器である白磁が約200片出土したほか、東日本では数少ない高麗青磁の破片が出土し、建物を造営した人物の社会的地位の高さがうかがえます。九条兼実の日記『玉葉』養和元年(1181年)によれば、越後平家の城四郎助職(長茂)は「白河御館」と呼ばれ、現在の阿賀野市域とされる白河荘を拠点としていました。当遺跡の東方700mには、長茂の名を記した経石が出土した横峯経塚群があります。時代・地域が符合する当遺跡の調査が、史料の少ない城氏の解明につながることを期待されます。(荒川隆史)



遺跡を西から望む(中央が調査区、上が五頭山麓)

大型掘立柱建物SB4は、長さ14.2mの周囲に底を持つ立派な建物で、北側に長さ20mにわたるL字形の回廊状施設が附属するようです。SB4の南側にあるSB5も、長さ12.8mで三面に底を持ちます。これらの南東側には木棺墓2基が付随するように見つかり、漆器椀・皿の優品が出土しました。また、当時高価であった大陸からの輸入磁器である白磁が約200片出土したほか、東日本では数少ない高麗青磁の破片が出土し、建物を造営した人物の社会的地位の高さがうかがえます。九条兼実の日記『玉葉』養和元年(1181年)によれば、越後平家の城四郎助職(長茂)は「白河御館」と呼ばれ、現在の阿賀野市域とされる白河荘を拠点としていました。当遺跡の東方700mには、長茂の名を記した経石が出土した横峯経塚群があります。時代・地域が符合する当遺跡の調査が、史料の少ない城氏の解明につながることを期待されます。(荒川隆史)



大型掘立柱建物(右SB4 左SB5)



木棺墓(長さ24m、右上隅から漆器椀が出土)

にしかわうちみなみ  
**西川内南遺跡**  
 (北蒲原郡中条町大字西川内字中曾根202ほか)

西川内南遺跡は越後平野の北東部に位置し、胎内川によって形成された扇状地の上に立地しています。日本海東北自動車道の建設に係る12,940㎡(2層延)平成16年4月～11月に発掘調査しました。調査の結果、地表下30cmで奈良・平安時代の層(上層)が、地表下1mで古墳時代前期の層(下層)がみつかりました。



道路状遺構



川底で見つかった杭列

上層では、県内では調査例の少ない道路状遺構が検出されました。また川からは橋と推定される杭列も見つかりました。

下層では、円形周溝状遺構2基、掘立柱建物3棟、多数の土坑などが検出されました。1号円形周溝状遺構は、直径約12mの周溝と1間×1間の掘立柱建物、土坑などで構成されています。周溝は東側が途切れ、出入口になっています。周溝の中からは祭祀に使われた舟形木製品が出土しました。2号円形周溝状遺構は、直径約15mの周溝と2間×2間の掘立柱建物、土坑で構成されています。周溝は途切れることなく全周し、覆土からは大量の土器が出土しました。出土遺物には数多くの土器のほか、木製の脚付盤、土錘、軟玉製の勾玉、小型銅鏡などがあります。

西川内南遺跡は、県内では発見例の少ない円形周溝状遺構や、舟形木製品・小型銅鏡といった祭祀遺物が出土したことから、紫雲寺湯(塩津湯)周辺における中心的集落であったことが推測されます。

(調査担当者：(株)吉田建設 野水晃子)



1号(手前)・2号(奥)円形周溝状遺構



舟形木製品出土状況

みちばた  
道端遺跡  
(岩船郡荒川町大字南新保蟹田地内)

道端遺跡は、新潟平野の北東部を流れる胎内川が形成した扇状地の末端、海岸砂丘と丘陵に挟まれた沖積低地に立地しています。国道113号荒川道路の建設に係る3,450㎡を、平成16年7月～9月にかけて発掘調査しました。調査の結果、縄文時代晩期前葉の遺物が集中して出土したブロック1か所・土坑1基、古墳時代前期の溝3条、奈良～平安時代の河川跡などが見つかりました。なかでも、縄文時代晩期(今から約3,000年前)の遺構・遺物が注目されます。特に、埋没する途中で火を焚いたと思われる土坑からは、アユ、コイ・サケ科などの魚類のほか、種類まではわかりませんでした。小型の哺乳類の焼けた骨が見つかりました。



遺跡近景(南西から：中央左側が日東道荒川インター予定地)

また、多量に出土した縄文土器は、ほとんどが深鉢型で、内外面におこげやススがベツトリと付着していたことから、遺跡でさかんに煮炊きがおこなわれていたことが分かります。ほかに、石鏃(矢じり)、石匙(携帯用ナイフ)、石錐(ドリル)などが数点ずつ出土しています。

古墳時代の溝からも甕・高杯などの土師器がまとまって出土しました。後世の削平のため残りは良くありませんでしたが、3条の溝がコの字型に並ぶことから、方形に溝がめぐる遺構の1部であると考えられます。奈良～平安時代(8世紀末頃)の川跡からは「山」「称?」の墨書土器が出土したことから、周辺には未だ発見されていない集落遺跡があるのかも知れません。

道端遺跡は、一般国道113号線、日本海東北自動車道建設等に係り、事業団、荒川町教育員会が今回を含め6回の発掘調査を行っています。これらの調査結果から、この周辺地域にはかなり広範囲にわたり遺跡が展開していた様子がうかがえます。(辻 範朗)



縄文時代(晩期)の土坑



古墳時代(前期)の溝

すざわかくち  
**須沢角地遺跡**  
 (糸魚川市大字大坪 3263 ほか)



竪穴住居

須沢角地遺跡は、国道8号線沿に位置する姫川左岸の沖積地、標高約6.2～6.8mの自然堤防状微高地に立地しています。北陸新幹線の建設に係り、平成16年10月～11月にかけて新幹線橋脚部分(2か所延286㎡)を発掘調査しました。調査の結果、奈良～平安時代(8世紀後半)の竪穴住居1軒、ピット9基などが見つかりました。竪穴住居は調査範囲外に延びていたため全容は不明ですが、5×6mにおよぶ比較的大型であり、床面積は18畳(約30㎡)以上になります。壁の内側には土留め用の板杭を立てたと思われる溝が廻り、出入口と思われるところだけ途切れています。

柱穴は1か所しか発見できませんでしたが、住居中央部分を中心に硬くしまった土層が確認されたことから、粘土を貼って床を作り出していたと推測されます。カマドの遺存状態は良くありませんでしたが、南東側で2か所の燃焼部が確認され、拳大の石や土器がまとまって出土しました。住居からは、食器として使われた須恵器の杯や蓋、貯蔵用の大甕、煮炊き用の土師器の甕などが発見されました。また、土製の紡錘車(糸紡ぎの錘)も住居から出土しました。

昭和62年には、当時の青海町教育委員が住宅建設に伴い現調査区から南東約100mの地点を発掘調査しています。その調査では、奈良～平安時代の竪穴住居31軒が検出され、紡錘車、農具(鉄製鋤先)、硯(風字硯)などが出土しています。このことから、当遺跡は、須沢地区一帯に存在していた大規模な古代集落の一部であると考えられます。

(辻 範朗)



2か所の燃焼部



カマドの検出状況



## 埋文インフォメーション



### 保存処理室から

遺跡から出土した木製品や金属製品は、出土後に乾燥して縮んだり、サビて壊れやすくなっています。これらを研究資料や歴史学習の教材として永く活用するため、保存処理室では遺物の収縮・腐食を予防し、強化する化学的な保存処理を行っています。保存処理室は、脆い遺物の精密検査を行い、治療する病院の役目を果たしています。

木製品の保存処理は、木材中の水分をラクチオールという人工的につくられた砂糖に入れ替え、結晶をつくらせることにより、出土した時の形を保つ処理を行っています。ラクチオールは、ガムに利用されているキシリトールの仲間です。虫が付きにくく、湿度の高い新潟の環境にも強いことから木製品の保存処理に利用しています。

金属製品の保存処理では、サビに隠れた形や構造をX線透過撮影により確認した後、グラインダーやメスなどを使って不要なサビを取り除きます。その後、サビの原因となる塩化物や硫化物を取り除き、樹脂を浸み込ませて強化する処理を行っています。

今年度は、柏崎市箕輪遺跡から出土した奈良・平安時代の皿や柄杓・曲物等の木製品のほか、上越市（旧柿崎町）木崎山遺跡から出土した県指定文化財の青銅製地鎮具等の保存処理を行いました。保存処理の終了した遺物は展示室で順次公開していきます。土器や石器と合わせ、いにしえの人々の息吹を感じてみませんか。  
(三ツ井朋子)



ラクチオールを浸み込ませた後、木材内部で結晶化を進めている平安時代の木製皿



実体顕微鏡の下で遺物を傷つけないようにグラインダーで注意深くサビを落している様子

### 第12回遺跡発掘調査報告会



出土品展示説明の様子

3月6日、三条市中央公民館で、三条市教育委員会と共同して遺跡発掘調査報告会を開催しました。当日は好天に恵まれ、626人の参加がありました。

発掘調査報告では、事業団は大坪（おおつぼ）遺跡（阿賀野市）など5遺跡、三条市教委が地元の割前（わりまえ）遺跡・吉津川（よしづがわ）遺跡について、調査成果を発表しました。

出土品展示では、事業団19遺跡（485点）、三条市教委2遺跡（132点）、計617点の出土品を展示しました。

報告会の内容については、事業団ホームページで公開しています。

## 報告書作成中の遺跡

### 北野遺跡：上層（東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほか）

福島県境に程近い東蒲原郡上川村に所在します。埋文にいがた45号（H15.12）で紹介しましたが、磐越自動車道の建設に先立ち、平成5～7年に発掘調査を行いました。調査の結果、約5,000年前に堆積した沼沢火山灰層を挟んで上下の層から遺構・遺物が見つかりました。下層は縄文時代早期前葉～前期末葉にわたり、早期中葉、前期前葉～中葉、前期後葉～末葉の住居・集落が明らかとなり、平成15年3月に報告書を刊行しています。

上層は平成15年から整理作業を始め、平成17年3月に報告書を刊行する予定です。現在、図版類の校正、原稿執筆など最後の追込み作業を行っています。調査の結果、縄文時代、平安時代、中世、近世などの多時期の遺構・遺物が明らかになりました。なかでも縄文時代は、中期末葉～後期初頭を主体に、中期前葉～中葉、中期後葉、後期中葉という4時期の集落跡の存在が明らかになりました。調査の成果については報告書で明らかにします。

（高橋保雄）



土坑一括土器（中期前～中葉）



中期末葉～後期前葉の土器群



剥片石器（石鏃・石錐・石匙）

### 細田遺跡（上越市大字黒田字細田）

細田遺跡は上信越自動車道建設に先立ち、平成9年4月～8月に発掘調査を行いました。遺跡は西頸城山地からのびる丘陵の裾部と沖積平地との境界付近に立地しています。西側の丘陵上には黒田古墳群（5・6世紀）が所在します。調査の結果、主に弥生終末期～古墳前期と古代（奈良・平安時代）の遺物が多数出土しました。弥生終末～古墳前期の明確な遺構は確認されませんが、2か所で土器がまとまって出土しました。窪地のようなところに土器が捨てられたものと考えられます。

古代では掘立柱建物4棟のほか、溝、井戸、土坑・ピットなどが確認されました。溝を中心として多数の土師器・須恵器が



掘立柱建物近景

出土しました。写真は凸帯付の蓋で、上部に粘土の帯を貼り付け、同心円の線模様があります。類似した蓋は群馬県北・西部の窯（月夜野町・高崎市・大胡町など）に多く見られます。

その他に、少量ですが様々な時期の遺物が出土しています。縄文時代後・晩期では縄文土器や磨製石斧等の石器、鎌倉～室町時代では珠洲焼や瀬戸美濃焼、中国産の青磁・白磁などの陶磁器類、江戸時代では肥前（現在の佐賀県域）陶磁器などがあります。大規模な遺跡ではありませんが、長い期間にわたる人々の活動の痕跡と土地利用の変遷を知る上で、貴重な情報を与えてくれます。報告書は平成17年度刊行予定です。（尾崎高宏）



古代の須恵器蓋  
（群馬県の影響を受けたもの）

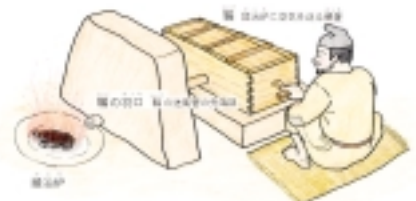
## 埋文コラム「発掘から見えてきたいにしへの製鉄」

日本で鉄の生産が始まったのは弥生時代とも古墳時代とも言われています。その技術は朝鮮半島から伝わったもので、半島に近い北部九州から全国へと普及していきました。

鉄は自然に金属鉄として産出することはまれで、大部分は鉄鉱石や砂鉄を燃焼して酸素を取り除くことによってつくられます。この、酸素を取り除く工程を製錬せいれんと言います。日本では主に砂鉄が原料とされ、燃料には木炭が使われました。まず、炉に砂鉄と木炭を詰め、火をつけます。そこへ風を送り火の勢いを強めると（この送風施設を鞴ふいごと言います）、最初に不純物を中心とした成分が熔けるため、炉の下部に孔を設けてそれらを流出させます。鉄は熔融状態になりながら炉の底部に生成され、塊状になって残ります。写真は柏崎市東原町遺跡から出土したもので、右手前は鉄の原料となる砂鉄、左は鉄滓（金くそ）です。右奥は上越市八反田遺跡から出土した鞴の羽口はぐちです。一方が欠けていますが、これは鞴から炉に風を送るための送風管の先端部です。このようにして生成された鉄から鉄器を製作するには、鍛造と鑄造の2つの方法があります。



左：鉄滓 右奥：羽口  
右手前：砂鉄



精錬・鍛錬鍛冶のようす

### 鍛造

まず、製錬と同じような作業を行います。同様の作業を繰り返すことにより、鉄の純度を高めるのです（この工程を精錬鍛冶と言います）。このようにして再び半熔融の状態にした鉄塊を台の上に置き、槌で打って練り鍛える（鍛打）ことによって形をつくっていきます（この工程を鍛錬鍛冶と言います）。左下の写真は槌と台石、それに鍛造する際に飛び散った火花＝かけら（鍛造剝片）です。

### 鑄造

まず、つくりたい器物の形を2つに分けて刻み、鑄型を製作します。次にこの鑄型を合わせて固定し、あらかじめ加熱しておき、熔融した鉄をすき間から流し込みます。鉄が固まったら型を取り外し、合わせ目からはみだしたバリを取り除き、磨いて完成です。主に仏具や鍋などの製作でこの手法が用いられたようですが、新潟県での鑄型の出土例は少なく、現在のところ確実にわかるものは中世以降のもので、このようにしてつくられた鉄製品が写真右下です（実際にこの遺跡内で作られたものかどうかは不明です）。上から刀子、鉄釘です。現在は錆に覆われたり変色したりしていますが、当時は切れ味も鋭く、輝きを放っていたことでしょう。（坂上有紀）

引用・参考文献 潮見 浩 1988『図解 技術の考古学』有斐閣



左：台石 右：槌  
（槌は長さ13cm）



鍛造剝片



奥：刀子 中：鉄 手前：釘  
（刀子は長さ27cm）

（3枚の写真はすべて東原町遺跡出土）

県内の遺跡・遺物 48

## 緒立遺跡（平成6年 県指定）

遺跡所在地：新潟市緒立流通2丁目ほか

昭和27年8月、緒立八幡宮本殿土留修復工事に伴い、社殿脇から1個の壺形土器が出土したことにより、緒立遺跡の存在がわかりました。

遺跡は海岸まで約3.5km、沖積地に埋没した砂丘列上にあり、八幡宮を中心に東から西にむかって緒立C遺跡・緒立A遺跡・緒立B遺跡が存在します。そのうち、緒立A遺跡全域と緒立C遺跡の一部（5,278.43㎡）が県指定史跡となっています。

緒立A遺跡は、緒立八幡宮境内のほぼ全域に位置し、社殿の下には古墳（緒立八幡宮古墳）が存在しています。古墳時代前期につくられた直径30mの円墳であり、墳丘表面には葺き石が残っています。県内で確認される古墳のほとんどは山麓・丘陵に存在していることから、広大な沖積平野のなかに単独で存在する古墳として注目されています。

緒立C遺跡は八幡宮の裏側に位置し、3遺跡のなかでは調査面積が一番広く、縄文時代、古墳時代前期、奈良・平安時代、中世の遺構・遺物が検出されています。特に奈良～平安時代については、大型倉庫と考えられる掘立柱建物、井戸などの遺構、サイコロ、瓦塔、和同開珎、木簡、祭祀遺物（人面墨書土器・木製品）などの遺物から、官衙（役所）的性格をもった遺跡ではないかと考えられています。さらに、800m東方にある、鮭漁を中心とした官営の水産基地と考えられる的場遺跡との関係が指摘されています。

（写真・資料提供 新潟市教育委員会）



古墳（円墳）葺き石（緒立A遺跡）



人面墨書土器（緒立C遺跡）  
（口径20.6cm 高さ33cm）



掘立柱建物跡（緒立C遺跡）

### 埋文にいがたNo. 50

発行（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団  
〒956-0845 新潟市金津93番地1  
TEL (0250) 25-3981  
FAX (0250) 25-3986  
e-mail: niigata@maibun.net  
URL: <http://www.maibun.net>  
印刷 新高速印刷(株)